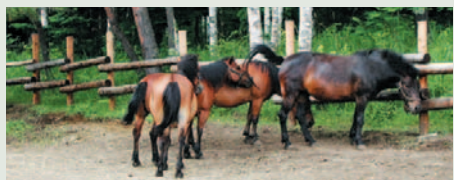


木曽川文庫

木曽川



木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
秋号は御嶽山に抱かれた開田村から
その歴史や自然災害を、
今回から特集する川と街道では、
中山道木曽路を中心にご紹介します。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《木曽郡開田村》

◆霊峰御嶽山に抱かれた、開田村

AREA REPORT

◆猛威をふるった開田村の自然災害

気ままにJOURNEY

◆美しい自然と歴史が息づく、開田高原

歴史ドキュメント

◆時代の要請とともに生まれ、成長し、
そして衰退してきた街道

TALK&TALK

◆木曽材の乱伐がもたらした林業地域の交代

民話の小箱

◆水無し八丁と弘法大師

国土交通省中部地方整備局
木曽川下流工事事務所

霊峰御嶽山に抱かれた開田村

豊富な森林資源に恵まれた開田村のあけぼのは、先土器から縄文早期豊かな川の幸は、原始の人々にとって絶好の環境でした。

しかし、稲作に向き不向きな土地柄のこと。

その歴史は山や田畑を切り開く道のりでした。

近世、尾張藩の支配下で、木曾馬の飼育や稲作が始められるように。

明治以降、交通網が徐々に整備され、

現在は高原野菜の生産や観光開発を中心に、村の発展に力を注いでいます。



地蔵峠より末川の集落を展望

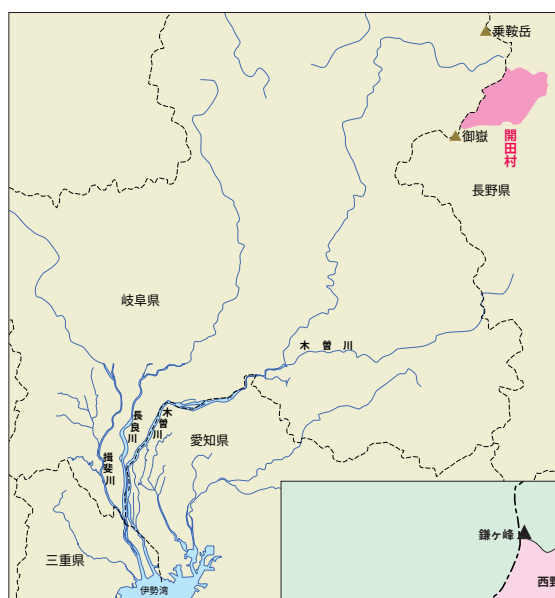
標高千二百mの高原地帯

霊峰御嶽山の山麓にひろがる開田村は、広大な高原地帯。村落のすべてが標高千二百mにおよぶ高地に点在する山村です。面積の九割を山林が占め、村名が示すように、その歴史はまさに山を開き、田を起こした道のりでした。

村内には、西野川とその支川、西又川、冷川、末川、把之沢川などが流れ、流域に集落が形成されています。年平均気温は八度と低く、九月初旬に初霜、一〇月上旬より初雪、晩雪は四月上旬まで残っています。南部を国道三六一号が横断。南東部の地蔵峠は難所でしたが、新地蔵トンネルの開通により、交通は便利になりました。高冷地での良質な高原野菜の栽培が盛んで、中部・関西地方へ出荷。御嶽山の麓から湧出する豊かな水は、御嶽山自然水として市場で人気を博しています。また、夏は涼と森林浴を求め、年々、観光客が増加しています。

開田村は縄文遺跡の宝庫

開田村は長野県下でも有数の先土器時代から縄文早期の遺跡の宝庫です。御嶽山の火山活動がおさまった頃の開田高原は、原始住民にとって絶好の住みやすい環境。狩猟に用いた矢



じりなどの石器をつくる材料に最適な黒曜石やチャートに恵まれ、しかも縄文時代直前の中石器と呼ばれる時代には、西野川や末川は木曾川を遡ってきた鮭や鱒の産卵場に、引き続き縄文時代に入ると、この広い高原地帯は熊・猪・兎などの絶好の猟場。これを物語るように末川には「鱒洲」という地名もあります。猟の道具と獲物がそろうという高原地帯は、原始住民にとって住みよい環境だったでしょう。全域に縄文遺跡は分布していますが、中でも柳又遺跡の石器は、先土器時代末明から縄文早期の貴重なもの、柳又型土器、舌先頭器と命名されています。しかし縄文中期・後期の遺跡は少なく、弥生時代の遺跡は皆無。この



柳又遺跡

時期が農耕を主体とする定住性の時代に移行していることを考えると、この村の先住民たちは何らかの事情で他へ移動したものと考えられます。降って平安後期の灰釉陶器が古屋敷遺跡や中沢遺跡から出土しているところを見ると、開田村の歴史時代は平安朝頃に始まったという見方が有力です。律令制下の開田村は、美濃国恵那郡に属していたと推定されます。

木曾氏の支配

中世の開田一帯は、木曾氏の支配であったと考えられます。文献によれば、西野峠の南西の城山は、南北朝期、西野の青木家の先祖で、木曾家の家臣の大矢右馬尉友重が築いた砦であるようです。天文二四年（一五五五）、武田晴信は木曾に進攻し、大滝村の木曾義康を攻め、その際木曾村から峠を越え、末川へ出ていくと伝えられています。険しい山々に抱かれた開田村にも、下剋上の戦火は飛び交ったのでした。この他にも、木曾義仲の側室が西野の豪族藤村氏の娘婿であったという話も残されています。藤村家は、江戸期に西野村の庄屋を勤めた家柄でした。江戸時代の開田村は当初は幕府領でしたが、元和元年（一六一五）から、尾張藩領

となりました。

御嶽信仰と覚明行者

人智の解明できない自然の現象、自然の力を恐れ、神として崇めたのが宗教の起源といわれています。御嶽信仰はこの最も古い信仰、すなわち山岳信仰がそのルーツ。文武天皇大宝年間（七〇一〜三）に役の小角が開山し、修験者の道場となっていたようです。山岳信仰は山岳そのものを神として崇めることから発展し、深山幽谷を聖地と考え、聖地に深く分け入って「行をつむ」ことが、神を体得する道だという考え方が生まれ、それが修験道につながりました。修験者は七五日から百日の精進・潔斎・参籠などの難行苦業をつみかさねた上ではじめて山頂に登り、山神・蔵王権現を拝むことができました。したがって一般人には登山登拝は許されず、この厳しい戒律を一般庶民の誰でも出来る軽潔斎に改めて、御嶽山を庶民に解放し、御嶽信仰を全国にひろめたのは、覚明行者でした。文献によれば、天明二年（一七八二）、御嶽の支配者である黒沢村の神官武居家を訪れ、一般信者の登拝の許可を願っています。このような覚明の行動は、江戸時代中期を過ぎ、全国的に交通の便もよくなり、当時全国にひろがっていた神仏一如の両部思想の影響を受け、霊山への一般信者の集団登拝の要望が高まったという歴史的社会的背景のもとに進められたようです。しかし覚明の願いは御嶽山の神威を守ろうとする神官や寺社奉行に阻まれ、逆に圧迫が強められました。

と。

とはいえ覚明は初心を捨てず、一方で登山道の改修を行ったり、一方で西野・末川などで山村の稲作の指導にあたりながら御嶽信仰をひろめたので、彼



覚明様の石造物群全景

に対する山村住民の信頼が高まり、山麓の黒沢・西野などでは農民はもちろんだ庄屋に至るまで、覚明に協力する者が増えたようです。覚明は、天明六年（一七八六）、御嶽山・二の池のほとりて立つたまま往生したと伝えられています。彼の死後、黒沢・西野・末川ら一〇ヶ村の村役人が連署して、一般信者の登拝を願出、寛政四年（一七九二）正月に、軽精進にて登山が許されました。

木曾馬と馬小作



田んぼの畦を自由に飛び回る木曾馬

木曾馬は日本古来の在来種で、その起源は縄文時代といわれています。古くは戦馬として大いに活用され、木曾義仲は京都に攻めあがる挙兵に際し一万騎の戦馬を募っており、その

主力は木曾馬だったようです。もちろん街道の大事な輸送用役馬であつたため、朝廷や領主が管掌していましたが、山村農民の農耕馬として重宝であつたため、次第に農民に飼育されるようになりました。ところが馬の権利は依然領主のもの。慶長年間（一五九六〜一六一五）に至つては「毛附馬の物成」と称する雑税が課せられるようになりました。

慶長一三年（一六〇八）の毛附馬の物成額の郡下各村の一覧表を見ると、末川・西野は郡下最高であり、当時から開田一帯は馬の主要産地であつたことを示しています。木曾馬の飼育数は、明治・大正・昭和にいたるまで木曾では最も多く、貴重な財政源となっていました。

しかし、個々の農家では馬を買う余力がなかったため、資本力のある木曾福島の商人や村内の有力農家から馬を借りて飼育をしてい



馬小作の台帳

ました。これが馬小作と呼ばれるもの。馬を木曾福島の毛附市で売った際、手にする金額は売上の三分の一か半分で、苦労して二年も飼育したあけくの取り分は、馬の所有者と同じでした。これらの馬の所有者は山村の中でも薬種業や医者など、特殊な家業で得た資金を馬に投資して大馬地主になつた者もいます。これらから、馬小作制度は必ずしも土地の半封建的所有と結びつたものではなく、貨幣経済・商品経済の発達とともに、地主よりもむしろ商人たちが馬持ちになつていったようです。

稲作の始まり

尾張藩が画期的な税制改革のために実施した享保検地のとき、末川・西野の集落には一坪の水田もありませんでした。開田村に初めて水田が開発されたのは、寛延元年（一七四八）、末川の庄屋中村彦三郎が



稗田の碑

代官山村氏に願い出て、水田開発の資金を借り受け、稗田を開発したのに始まっています。安永五年（一七七七）建立の稗田の碑によれば、彦三郎が延享年間（一七四四〜四八）に稗、続いて稲の栽培に取り組み、寛延元年に水田開発に成功。西野では天明七年（一七八七）に稗田を開いていますが、その開田にあつては覚明行者が稗の栽培方法をたらしたといわれています。開田村のような高冷地で江戸期に稲作が始められたのは珍しいケース。とはいえ、霜や雪のない月はずか二か月という環境下の稲作は容易ではなく、昭和まで凶作に脅かされてきました。そんな過酷な自然環境の中で、把之沢の畑田忠右衛門や藤屋洞の山本良吉は、品種改良に生涯を捧げた篤農家でした。

山林支配をめぐる訴訟運動

明治三二年、市町村制施行により、開田村は現在の姿となりました。

良質な森林資源を有する開田村の山林は、江戸期にはほぼ全山を尾張藩所有、明治三二年に皇室御料林に組込まれました。公有林に指定されれば、木一本伐採出来ない過酷な山林支配に対して、開田村では訴訟運動を開始しました。これが末川村八一名の名で訴訟がなされた。これが末川村コモノ沢事件といわれるもので、開田・福島郡当局が介入しても解決せず、結局、島崎藤村の兄島崎広介の努力で、明治三七年、御下賜金交付ということで決着しています。一方、西野でも西野事件と呼ばれる御料林との境界問題が発生。西野の上田多吉が御料局と対決しますが、これも島崎広助の斡旋で解決しました。しかし、上田多吉は皇室相手に最期まで裁判闘争を続けました。

交通網の整備

険しい山々に抱かれた開田村では、近代に入つても交通の整備が遅れていました。木曾福島からの険しい峠越えの難所が、その大きな理由。御料林の木材を搬出するための森林鉄道末川本線は昭和和一八年に開通、目的は材木輸送でしたが、開田村民の乗車も許されたため、村では大きな期待で迎えられました。昭和四一年には、ようやく木曾福島から岐阜県境の長峰峠まで福島高山線が開通しています。昭和四九年、木曾福島から開田を通り、岐阜県高山市へ通じる道が国道三六一号に、昭和六二年には新地蔵トンネルが開通し、交通アクセスは飛躍的に改善。それまでの地蔵峠越えの三六一号は御嶽山や乗鞍等の眺望がすばらしく冬期を除いて観光道路となつています。村では豊かな自然環境を生かした観光開発に励んでいます。



森林鉄道の軌道跡



新地蔵トンネル

参考文献

『開田村誌』 上・下巻昭和五五年開田村『長野県地名大事典』 角川書店



御嶽山有史以来の噴火(昭和54年10月28日午前5時25分撮影)

御嶽山の火山活動

地質学者によれば、今から百万年前の新生代第四紀のはじめ頃、最初の火山噴出が起ったとされており、その時の噴出物を地蔵峠火山岩類と呼んでいます。

開田村を北から南へ流れるいくつかの小さな山並み、長峰峠・藤沢峠・関谷峠・西野峠・地蔵峠などは、すべてこの時の噴出物の堆積した上の凹部を流れるいくつかの河川によって縦断されて出来たものとされています。この地蔵峠火山岩類が堆積して出来た山頂面を地蔵嶺面と呼んでいます。地蔵峠火山岩類は、約一五〇m以下の一様の厚さを成し、開田村・三岳村・木曽福島町・土渇村・上松町にわたる広い地蔵嶺山脈をおおって分布しています。

猛威をふるった 開田村の自然災害

秀麗な姿をみせる御嶽山。

今ではすっかり穏やかな表情をみせる霊峰も、突然、大きな音を響かせ噴火。

広い範囲にわたって降り注いだ灰は、多大な被害をもたらしました。

御嶽山は死火山に近い休火山と考えられていただけに、

その噴火は、自然の恐ろしさをみせつけたのでした。

昭和五八年に襲来した台風一〇号も、大きな爪痕を残しています。

御嶽の火山活動は新生代第四紀に爆発を繰り返して、その都度溶岩や軽石などを噴出し、その裾野に広がる開田村地域に、大きな影響を与えています。

しかしそれ以降、死火山に近い休火山でおそらく火山活動を再開することはないと思われていました。

有史以来、初の御嶽山の噴火

昭和五四年一〇月二八日早朝、開田村の南西にそびえる御嶽山は突然、噴火しました。この大噴火は文献記録にはあきり木曽御嶽噴火として記されている限りでは有史以来はじめてのことでした。噴煙は四〜五km上空にまで達し、西からの風によって長野県のほぼ全域と群馬県の一部にまで灰を降らせました。特に開田村への降灰は最も多く、農産物や養魚など

に大きな被害を与えました。

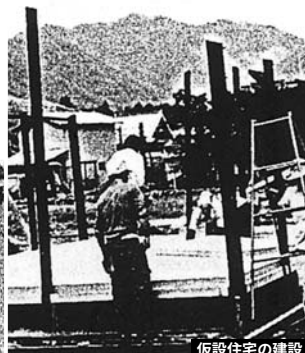
噴火当日の降灰は、午前八時頃から確認され、最も激しかったのは午後一時から午後四時頃まで。国道三六一号は九蔵から中沢間が、上から降る灰と通行する自動車巻き上げの灰で、ライトを点灯しても通行が困難な状態のときがありました。夜に入って降灰はほとんどなくなりましたが、それまでに村内に降灰した量は約五〇万tと推定され、この内二〇七tが畑などの耕地に降灰したものと考えられています。

被害は、秋の漬物、牧草を中心に、水産業者のヤマメ・マス・イワナ、また水田、畑の土壌の酸性化など、御嶽山麓三村の中でも、特に大きな打撃を受けました。降灰による問題は、次年度以降の農作物にまで影響をもたらしたことでした。

噴火が鎮静した後、降灰による土壌改良事業も実施され、開田村は平穏な暮らしを取り戻しました。

猛威をふるった台風一〇号

昭和五八年九月二七日、開田村に空前の被害をもたらす台風一〇号が襲来しました。二



仮設住宅の建設



石灰散布する保健所職員



下畑今朝蔵さん宅の裏山が崖れ家に土砂が



土石流は一瞬にして耕地をのみこんだ(伊之沢)

七日午前零時からの雨量は二〇mmを越え、しかも依然として降り続く状態を判断し、村長を本部長とする「開田村災害対策本部」を、二八日午後三時に設置しました。当時の開田村は、災害当日の一か月前から、五〇mmの雨が降り続いていました。開田村の平均年間降雨量が約二、千mmですから、その四分の一が九月に降ったことになりました。

ちなみに、昭和四六年九月の集中豪雨の時は四五〇mm、台風一〇号襲来した同年の五月集中豪雨は三五〇mmと、過去の災害を越える規模でした。時間雨量を見ても台風一〇号災

KISSO INFORMATION



船頭平河川公園がオープン

本曽川文庫がある船頭平には、平成二年五月、国の重要文化財に指定された閘門があります。この周辺一・五五haは桜の名所として多くの人が訪れる所です。

平成一四年四月二四日、船頭平閘門西側の長良川左岸で整備を進めていた船頭平河川公園が完成し、国土交通省や地元の関係者らが出席して完成式が開かれました。

今回完成した公園は、愛知・岐阜・三重の三県にまたがる国営本曽三川公園の中央水郷地区の一つとして、船頭平閘門の南西に広がる高水敷を利用して整備されたものです。

約二・七haの園内には、一五種の花を、はじめ、カキツバタ・キンウワブ・コウホネ・スイレンなどの水生植物が植えられ、「花とふれあい、花とともに心豊かに時を過ごすことができる公園」をテーマにした水生



植物園となっています。水生植物園では河川の水を取り入れ、植物のもつ浄化作用によって浄化された水を再び河川へ放流、環境保全をも目的としています。完成式では、代表者八名がテープカットし、来賓者や地元の立田村南部小学校福原分校の児童六名が参加し、サトザクラが記念植樹されました。このように船頭平河川公園では水生植物をはじめ、ウメ・サクラ・ツツジ・アジサイなどの花々が、年間を通して楽しめます。これまでの河川公園とあわせ、ぜひ、ご利用ください。



害では一時間に四六mm(二八日午後四時〜五時)で、それ以前まで最高と言われたきた昭和四六年集中豪雨の三四mmをはるかに上回りました。開田村の被害総額は

項目	開田村	木曽郡下全体
住家への浸水	175棟(178世帯677人)	578棟
耕地関係	156件 76,700万円	691件 209,200万円
農作物関係		8,164万円 16,700万円
林業関係	177件 66,955万円	933件 366,025万円
土木関係	253件 351,580万円	911件 1,261,705万円
水道関係	2件 1,861万円	25件 7,517万円
商工関係	6件 150万円	105件 47,344万円
被害総額(住宅を除く)	505,410万円	1,925,401万円

被害状況
五〇億五千万円。被害状況は概ね表の通りですが、この被害額は木曽郡下で最高となっています。郡下全体被害額は一九二億四千万、したがってこの額の四分の一は開田村の被害ということになります。なお、住宅の被害額については算出されていません。具体的な被害の実態は、水道施設・道路・河川・農業用施設の決壊、橋梁の流失、人家・畜舎・養魚場、水田の埋没など。なお、床上浸水した被災者のために仮設住宅を建設、被災後の一〇月三日と四日の両日には、木曽保健所の職員が中心となり、被災住宅(床下浸水を含む)に対して、石灰の散布を行い伝染病の予防に努めました。

災害復旧事業

災害復旧事業は、次のように行われました。
《長野県の実施箇所》
・西野川高坪上橋下他 一六か所
・西又川馬里橋他 九か所
・藤沢川上栗尾橋上他 九か所
・末川水源地横他 九か所
・髭沢川髭沢上他 五か所
・国道三六一号展望台他 一六か所
・県道越々木曽福島線
合計八か所
《開田村の実施箇所》
・河川恩木沢他 二二か所
・道路小西一他 二六か所

■参考文献
『開田村村誌』 上下巻昭和五五年開田村広報かいだ 昭和五八年二月三日
・橋梁小野原橋他 六か所合計五七か所
こうした復旧事業のほか、床上浸水した被災世帯に対し、長野県から見舞金、また村の社会福祉協議会と共同募金会からも、被害の程度によりそれぞれ見舞金が贈られました。これに併せ、日本赤十字社からは被災世帯に対し、救急用品セットが届けられました。

美しい自然と歴史が息づく 開田高原



木曽馬の里

緑の高原でゆったりと草を食む木曽馬たち。牧場の向こうには、御嶽山が雄大な姿をみせる。厳しさも美しさも背中合わせの自然だからこそ心温まるドラマが生まれたのであろうか。野辺の石地蔵さまは、今日も道行く人々を静かに見守っている。

神々が宿る山

木曽福島から国道三六一号を走り、新地蔵トンネルを抜けると、そこは開田村です。人の前に立ちはだかた峠という難所も、トンネルの開通によりわずか二三分という手軽さで秘境と呼ばれた開田村へ。うつすらと初雪をいただいた御嶽山を間近にみることができ、息を呑むほどの神々しさは、まさに霊峰。覚明行者が生涯を賭して庶民へ信仰の道を切り開いたのも、自然だけがもつ孤高の尊厳に少しでも近づきたいと願ったからなのでしょう。雲の影を抱いた山並みは凛として美しく、白さが際立つ白樺は、自然の息吹を静かに伝えてくれました。

木曽馬の里

御嶽山の麓、その緑の大地に広がる「木曽馬の里」は乗馬も体験できる木曽馬の牧場です。親子連れの馬たちがのどかに草を食べていました。

つややかなたてがみ、ひきしまった体躯。そ



木曽馬の里スタッフ・古田奈緒子さん

のスレンダーな姿は、一枚のポートレートのよう。ずんぐりとした体、太くて短い足。そんな木曽馬のイメージはどこへやら。確かにアラブやサラブレッドより一回りも二回りも小さく、足も短いのが木曽馬の特徴です。とはいえ、雄大な御嶽山にも負けないほどのりりしきは、人に代わって田を耕し雪を踏み分けた強靱な体力ゆえなのでしょう。そんな木曽馬のベストショットをとるべくカメラと格闘していると、木曽馬の里のスタッフ、古田奈緒子さんが話しかけてくれました。

「木曽馬はとても温厚で、優しい馬です。平均体高は一二三cmですから、乗馬をされても高さの威圧感を感じることはありません。それにしては賢くて、餌の時間はちゃんとわかっているみたい。私たちスタッフの足音を聞きつけて、走りよってきます。もちろんさわっても大丈夫。人なつこくて可愛いですよ」

古田さんの言葉に背中をおされ、おそろお

そろ手を差し伸べると、子馬が甘えた仕草で頬すりしてくれました。

農耕馬として、厳しい労働に耐えてきた木曽馬は、厳しい山の自然環境下で生活する開田村の人々にとって生きる糧そのものでした。だからこそ家族同様に大切に育ててきたよう。で、住居も人間と同じ家の中。屋内でも南側や東側の一番よい場所を与えられていました。子馬が生まれれば、人間の赤ん坊と同じように赤飯を炊いて祝い、馬市へ出荷する時は飼主と馬が泣いて別れるなど、馬にまつわるエピソードは枚挙にいとまがないほど。木曽馬がこんなにも人なつこいのは、惜しみない愛情が注がれてきたからなのでしょう。ひづめは堅く、蹄鉄をうつ必要はありません。丈夫で安定性のある足なので、急な坂道を駆け上ったりするるのが上手な馬です。鞭も罵声も知らない木曽馬は、人の言葉をよく理解し調教しやすいといわれています。

県宝 山道家住宅

長い首をのびせば厩舎裏に届くような馬と人間の同居生活。家族と同じ木曽馬だから、病気となれば一大事。薬を厚く敷き、その上に毛布を広げ人間が添い寝して、手厚く看病したようです。そんな馬の病気の時に活躍したのが、山道家です。

山道家は江戸中期より大正初期に至るまで、木曽馬盛衰の歴史を刻んだ大馬主。また、



県宝 山道家住宅



山道家に伝わる馬医書

伯楽と称する馬医者を兼ねた木曽地方の豪家でした。しかし、大正・昭和の農村不況と木曽馬の凋落とともに没落し、残された居宅が、平成六年、古林家研究家の権威で工学博士の大川直躬氏の鑑定を受け、長野県教育委員会が県宝に指定しています。山道家の祖先は、飛騨国主金森頼直の馬奉行に仕えていましたが、金森氏の出羽国への移封に伴い、こゝ西野村へ。その時馬奉行から賜ったのが主家相伝の馬医書。慶安四年（一六五二）に編纂された馬医書は、漢方薬調合罫書などとともに現在も残されており、当時を知る貴重な史料となっています。

丸山の馬頭観音



丸山馬頭観世音菩薩像

開田村には千二百を越える馬頭観音が祀られています。野辺の馬頭観音の石碑は、いわば馬の墓石です。大切に飼育した馬が病気で怪我などで死んでしまうと、遺体を定められた馬墓地に運び、ていねいに埋葬する。その霊を弔うために建てられたのが馬頭観音です。

末川集落の北東、丸山と呼ばれる小丘の山頂には、享保一六年（一七三二）建立の馬頭観音が祀られています。この丸山の馬頭観音は、大桑村の岩出観音・日義村の渡沢観音とともに木曽三大馬頭観音の一つ。村の伝承によれば、昔、丸山の麓に

鉱泉があり、木曽義仲の家臣が落ち延びて、そこに薬師堂を建て本尊として祀ったものを、後に馬の安全祈願の観音さまとして、山の頂上に

移して安置したと言



丸山観音の観音堂

開・田・村・の・歳・時・記

◆ 開田高原そば祭り ◆

10月第1日曜日



開田村の「収穫の秋」を彩る一大イベント。村民、観光客の別なく、集まった人々に採れたてのそばが振る舞われます。また、そば食競走では、最高記録45杯にチャレンジする人たちが盛り上がり、郷土芸能や農林産物の販売など、開田村の自然と伝統文化を満喫できる1日間です。

開田高原の特産物

すんき

開田でとれた新鮮なカブの茎を、乳酸菌だけで発酵させた酸味のある漬物。長野県産の文化財に指定されています。11月から3月の旬の季節になると、そば屋などで名物「すんきそば」として味わうことのできる珍味です。



農民が冬の農閑期に編み上げたわら細工。中でも馬細工は縁起物として喜ばれる逸品です。開田高原の白樺で作られた工芸品には木の温もりが感じられ、心安らぐお土産として人気を集めています。



わら細工 白樺工芸品

開田の天然水



御嶽山の懐に400年もの間抱かれた雪解け水を、標高1,600mで採水。胃腸にも肌にもやさしい超軟水なので、赤ちゃんからお年寄りまで安心して飲める天然水です。



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋 東名高速道路 中津川IC 国道19号 木曽福島 国道361号 開田村

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 JR 中央西線(約1時間25分) 木曽福島 バス(約40分)

●お問い合わせ●

◆開田村 397-0300 長野県木曽郡開田村役場 TEL0264-42-3331

気ままにJOURNEY

平次郎地蔵の伝説

馬頭観音さまが馬の歴史を刻む石碑なら西野の森にボンとたたずむ平次郎地蔵は、村の悲しい歴史を語り継ぐお地蔵さまです。江戸時代のこと、開田村の人々は尾張藩の厳しい規則に苦しんでいました。豊富な森林資源を守るため、尾張藩はほとんどの山を藩の所有にした他、山の民の農業の方法である野焼きを禁止していました。野焼きで森林が類焼することを恐れたためです。ところがある



平次郎地蔵菩薩像

日、野焼きが尾張藩の山まで燃え広がり、大騒ぎとなりました。この時「わしが申し開きをしなさい」と進みでたのが、日頃無口な平次郎でした。翌日、平次郎は尾張藩の役人の前に出て、あの火事は櫓の枝が繁りすぎて自然に火が出たものだとし開きしました。実際に櫓の枝を使って火を出してみせました。驚いた役人たちは「このバレンめ」とひどく怒鳴りつけた上、数日後打ち首にしました。火が出たのは妖術を使うバレンにちがいないとの裁きだったでしょう。しかし、この山火事事件の犠牲者は平次郎一人。おかげで村人も庄屋も難を逃れました。その数年後、庄屋の発起で平次郎を供養するために道標を築いたお地蔵さまが建てられました。それが、西野下の原、覚明堂の隣に祀られている平次郎地蔵です。地蔵に姿を変えた平次郎は、今では道中安全の道標として人々を静かに見守っています。

開田そばを味わおう!!

夏でも朝夕には霧が立ち、昼夜の気温差が大きい土地柄が、そばの味を磨いているようです。それは、米作りに向かない山間地に暮らしてきた人々の生活の智慧。生育期間が七五

日と短いため、開田では昔から盛んに作られてきました。そばの花が咲くのは、八月中旬から九月初旬にかけて。白く小さな花がたぐさん集まると、まるで雪がつもったかのようにみえます。開田高原に初霜が降りる頃、そば畑にそばの実が実り、御嶽山に初雪が降る頃、そばの収穫はすべて終わります。秋、刈り取られたそばは束ねられ、支えられるように立てられます。その上に雨などをよけるため、帽子のようにそばの束をかぶせます。これがそば立てと呼ばれる、開田の秋の風物詩。戦国時代、開田に攻め込んだ武田軍がこのそばを立てて兵士の姿に見間違え、その余りの多さに驚いて一目散に逃げ帰ったといわれています。「一度おいでよ開田の里へ。娘が自慢の手打ちそば。昔は、そばを打てない



そば道場

と嫁にもいけな いといわれており、それほどそばは食生活の要であつたといえます。こうした風土・風習によて育まれたそばは、まさに味の芸術品。晩秋から初冬の新作の季節になると、全国のおそば通で、開田のおそば屋はにぎわいをみせるとか。それぞれの店で食べ比べてみるのもよし、木曽馬の里にある「そば道楽体験道場」でそば体験するのもよし。はたまた、そば工場を見学するのもよし。開田でしか味わえないそばを、それぞれのスタイルで、その深い味わいは、旅のフィナーレをより味わい深いものにしてくれることでしょう。



ざるそば



村営そば工場

として利用されるようになったと考えられます。

尾張藩による

木曾山・木曾川の一元支配

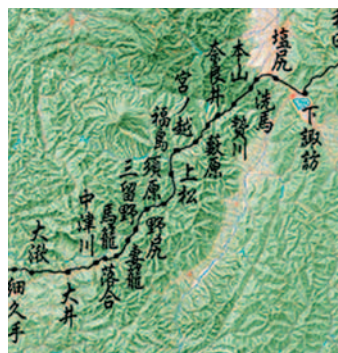
このように豊富な木曾の美林が真にその価値を高めたのは、伐木と木曾川を利用した運材の技法が確立された戦国末期以降のこと。織豊政権の成立によつて輸送路としての木曾川が一貫して使用できるようになったことから、伊勢から杣（もろ）や日用がまず木曾南部の湯船沢や田立に入り、伊勢神宮用材を盛んに伐採し始めました。南木曾町に残された伊勢小屋沢や伊勢山という地名は、伊勢神宮とのつながりを示しているようです。彼らの技術を元に木曾式伐木運材法を確立。豊臣秀吉は大坂城築城や聚楽策、方広寺大仏殿などの造営に木曾材を使用。関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は木曾を直轄領とし、城下町や城郭の建設に木曾材を大いに利用しました。その後、大坂夏の陣によつて豊臣氏が滅びた元和元年（一六一五）、家康は木曾を九男義直に与え、以後木曾は尾張藩領となりました。

この時から、木曾山・木曾川は尾張藩による一元支配となりますが、それにあたっては、尾張藩の家老で大山村主の成瀬隼人正が、名古屋に立ち寄った徳川家康に「木曾の山と川とともに拝領、まことに有り難く」と御礼を申し上げたことによると言われています。これは木曾山をもつても木材を運び出す木曾川が必要だと知っていた家老成瀬の機転。家康は当初木曾山のみと考えていたようですが、この一言が木曾の山と木曾川とともに尾張藩領とする動機となったようです。

戦国末期から江戸初期にかけての建築ラッシュの時代、木曾材は建築用材として大きな比重を占めたが、わずか半世紀の間に田立を手始めに王滝の奥まで伐り尽くすという乱伐の結果、木曾の山々の荒廃は激しくなり、尾張藩は木曾材の伐採を制限する制度を次々と制定しています。



時代の要請とともに生まれ、成長し、そして衰退してきた街道



街道は生活の中で自然発生的に生まれてきた街道の他、国家の大きな目的のもとに計画的に造られてきました。東西の回廊ともいべき中部地方にも、古来より多くの街道が発達。もう一つの大動脈、木曾三川という交通路と交わることで、その機能を複合的に強化してきました。そんな川と街道をテーマにシリーズを展開。今回は、木曾山の玄関として古くから発達した南木曾町・妻籠宿を中心に、川と街道の役割を紹介します。

古代から脚光を浴びた木曾山

山深く谷の険しい木曾山は、日本有数の美林地帯です。木曾山の豊かな森林資源は古代から注目され、天平一七年（七四五）の正倉院文書のうち木工寮解には「飛騨匠州八人」と記されており、飛騨から木曾一帯の森林資源と木工職人達の存在が中央にも知られていたことを示唆しています。伊勢神宮の遷宮用材も早くから木曾材を利用したようですが古い記録はなく、鎌倉時代の弘安八年（一二八五）に、初めて木曾材を伊勢に運んだ記録があります。木曾材の輸送については、尾張藩が木曾山を完全に掌握する前までは、記録によれば、一世紀から一六世紀まで、川下げ材は美濃の墨俣で陸揚げされ、その後陸上輸送されたあと、琵琶湖上は舟運で天津まで、そこから畿内各

地の需要地へ陸送あるいは宇治川を舟運で運ばれました。しかし多くを人力による時代のこといずれにしろ木材の輸送は容易なことではありませんでした。

東山道の迂回路として整備された吉蘇路

豊富な森林資源に恵まれながらも、山深く谷の険しい木曾は、稲作には不向きな地でした。その木曾に人々が住み着くようになったのは、和銅八年（七二三）の吉蘇路の開通がきっかけでした。別名、和銅古道とも呼ばれるこの街道は、都と東国を結ぶ官道、東山道の迂回路として整備されたもの。東山道一番の難所神坂越え（中津川市）を避けるため、木曾谷を縦貫して整備されました。しかし、古代人にとってはほとんど

無人の山深い吉蘇路に行くよりも、險阻で危険であつても、神坂峠さえ我慢すれば、人家の多い東山道の方が安心できたでしょう。多大な経費と努力を費やして整備したものの、街道の安全性や駅の機能を維持するだけの人口が伴わなかったことが、利用に結びつかなかった原因と考えられます。むしろ木曾は、和銅八年に吉蘇路が通じたことが契機となり徐々に開発の手が入り、人口も増加していったようです。そして約一世紀半後の貞観年中（八五九〜八七七）に、木曾の所屬をめぐる紛争が発生していますが、これは開発の結果、木曾の価値が高まったからであろうと思われる。所三男氏はこの点につき次のように述べています。

「吉蘇路の開発に始まって元慶三年（八七九）に終止符を打たれる信美両国の境界争議は、信濃側から要求に端を発したものであることは自明であるが、その要求なるものは、必ずしも領土侵略的な意図によるものではなく、それよりも和銅に開けた吉蘇路を触媒としての森林資源確保意欲つまり、木曾の檜美林を信濃の国のものとする欲求が強かったとみなくてはならない」

木曾の価値は檜美林にあることは無論ですが、耕地もまた、木曾路を通じて流入してきた人々によつて拡大されていったようです。平安後期には大吉祖荘などの荘園が成立。木曾山を縦貫する吉蘇路は、納税の道として、また樺・土居などに加工された白木を馬で搬出する道

尾張藩による厳しい 木曽川管理体制

尾張藩は、木曽山各所に留山（入山を禁止した山）を設定し、木材伐採を禁止したことをはじめ、木曽山には上松に材木役所を、木曽川の各所には川並番所を設け、盗木などを厳しく監視しました。一方、木曽式伐木運材法により木曽川を流下させる木曽材も厳しく監視。洪水により流出した木材の見張りには、木曽川沿岸の村々に当たらせていたようで、妻籠村の場合、木曽川については三留野村との境の渡島出来石から山口村との境の大堀りまでを担当。大水が出る度に木材を岸に引き揚げて、その本数を役所に報告しなければなりません。また洪水が予想されると、川を下る木材は予め土場等に掲げて流されないようにするのですが、時として予想以上の出水で岸に揚げた材木が流された時など、その対応は大変なものでした。

日本でも有数の木曽の檜美林は、木曽川を利用して搬出方法で全国的にその名を高め、地場産業として大いに発展していきませんが、その半面、木曽で生活する人々にとっては、厳し過ぎる規制と過酷な労役が生活を逼迫する原因に。他に比肩すべくもない素晴らしい資源を有していたことが、逆にこのような理不尽な規制にもつながっていたのです。



往時の面影を残す中山道

木曽路と白木改番所

木曽川が木曽材を流下させていた水路なら、樽や土居などを搬出して陸路が中山道です。これは東海道とともに五街道として江戸初期に制定された街道ですが、その前身は東山道。古代から中世にかけて畿内と東国を結ぶ



中山道妻籠宿の高札場

重要な街道でした。木曽山一帯も中山道が開かれて木曾一宿が整備され、この間を木曽路と呼んでいました。木曽路は「大名街道」とか「緋の道」と呼ばれていました。が、それは尾張藩主が参勤交代に際して、多くの道を行き来したため、木曾が尾張藩の支配地であることや、東海道のように洪水による川止めがなかったことが大きな理由でした。

この木曽路に設けられたのが白木改番所です。これは樽・土居などの半製品を監視するための関所。木曾一宿内の妻籠宿には、一石板白木改番所を設置。尾張藩の刻印のないものは小枝一本、通させなかったといわれています。山の民にとって、山の資源は大切な糧。高野槇という樹木の皮である槇皮は、火縄銃の火縄に使われる貴重品。したがって、尾張藩が禁止木に指定していたため、山の民は苛境に追い込まれていたようです。



一石板白木改番所跡

中山道の迂回路として 整備された与川道

多くの大名が往き来し、そして木材製品が運ばれた中山道でしたが、深き山を貫く木曽路のこと。木曾八景と呼ばれる自然の美しさもさることながら、三留野と野尻の間の羅天は、山が木曽川に垂直に落ちるような難所。こうした連続する難所の中で、旅人がしばしの休息をとれたのが、妻籠宿近くの男滝・女滝。木曾に街道ができ、以来、旅人に名所として親しま

天保の蛇抜け被害は 南木曽最大級

れ、吉川英治著「宮本武蔵の舞台」としてもとりあげられた所です。この木曽路も、災害が通行に支障をきたすことが多々ありました。というのも、南木曽一帯の山々は急峻であつたため、いったん大雨が降ると、蛇抜けと呼ばれる山津波を引き起こしていたからです。こうした蛇抜け災害を回避するための迂回路として整備されたのが与川道。三留野と野尻の間をつなぐ道でした。江戸時代を通じて六人の姫君が京都から江戸へ降嫁していますが、そのうち、享保一六年（一七三二）の比宮（今みのみや）と文化元年（一八〇四）の樂宮（さきののみや）の二人までが与川道を通っていることから、利用度の高さが推察されます。



男滝



女滝

せっかく整備された与川道も、蛇抜けにより多大な被害が発生しています。時に天保一五年（一八四四）、与川村下山の中沢で大規模な蛇抜けが発生。一瞬にして日用杉小屋を呑み込みました。死者は九十九名（明確な者のみで、これ以外にも相当な死者が出たと思われる）。これほどの犠牲をだした蛇抜けは、おそらく南木曽災害史上最大のものであると考えられます。当時の模様は、島崎藤村の「夜明け前の資料」ともなつた「大黒屋日記」に残されています。それによれば、当時与川山では、御用材の伐採が行われており、多くの杉・日用が伐木運材に従事。蛇抜けによつて全壊した飯場には、五組の杉や日用一・二名が寝泊まりしていました。が、そのうち、九十九名が死亡、七名が重軽傷で無事に脱出できたのはわずか六名だったとか。夜中の出来事だけに、被害は、このほか大きく



蛇抜け被害者を弔う石地藏



蛇抜けが発生した与川

■参考文献

- 『南木曽町誌』 通史編昭和五七年南木曽町
- 『木曾三川流域誌』 平成四年建設省
- 『広報なきぞ』 南木曽町
- 『南木曽の歴史』 歴史資料館展示図録
- 『平成八年南木曽町博物館』
- 『木曾一歴史・文学・地誌』
- 『著者川崎敏昭和四八年木耳社』
- 『木曾山と住民』
- 『南木曽町博物館長遠山高志著』

木曽材の乱伐がもたらした 林業地域の交代

藤田 佳久氏 (愛知大学文学部・地理学)



藤田 佳久氏

略 歴
1940年、愛知県生まれ。
現在、愛知大学文学部教授、愛知大学大学院
長、理学博士。

専 攻
地理学、人文地理学、経済地理学、地域システム論。

現在の主な研究テーマ
農山村地域の総合的研究、豊川流域の霞堤
研究、東亜同文書院と中国の地域研究、イギ
リスの緑地環境研究。

主な著書
『日本の山村』(地人書房)、『東亜同文書院・
中国大調査旅行の研究』(大明堂)ほか

一、はじめに

この小論は、江戸時代中期にいわゆる「木曾山」をめぐって生じた尾張藩による森林資源管理政策が、他の森林地域に玉突き的に影響を及ぼし、新たな育林技術を生む契機になったこ

とを示したものである。それによって、わが国林業史における木曾山の果たした役割も見えてこよう。

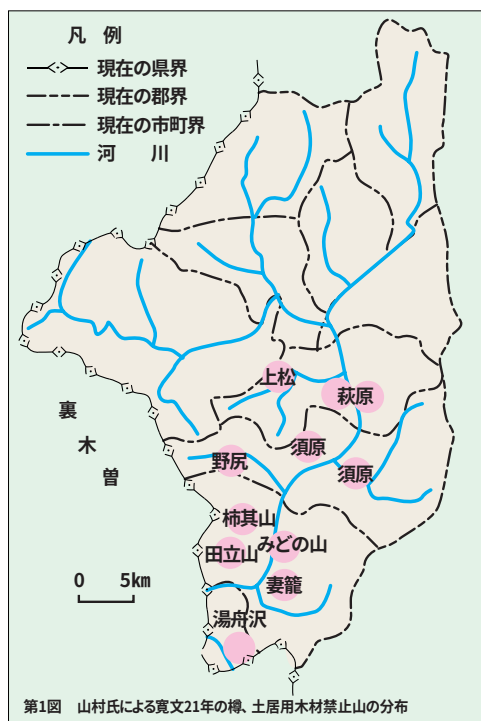
二、尾張藩による木曾山の管理

戦国時代から江戸時代中期にかけての木曾山は、豊かな森林資源とそれを運送できる木曾川の流れによって、日本では最大級の木材生産地であった。古くは飛騨の山々の森林資源とともに都に知られ、のちには木曾松がそのすぐれた材質によって名声を得、秀吉も天下をとると、すぐに木曾山を自分の領地にし、木曾材で聚楽第や寺院、城廊などをつくったほどであった。

例えば、宝永六年(一七〇九)に木曾路を歩いて木曾谷を記録した貝原益軒(篤信)は、

「その木横紋ありて器に作るべしといふとも、尾州より禁制ありて切らず。実を民の食物にするゆえに、材木を切る仙人は尾州より和泉紀伊国近江の人傭いてつかわさる。毎年春の雪消、二、三月に山に入りて十月に出る。およそ幾千百人といふことを知らず。春は山に入る仙人はまさかりなど持ちて、毎日ひきもきらず上方より木曾へ通る。この仙人ども山の中にありて居住す。木を伐り、材木に削り、あるいは樽に削りて、長四尺ばかりなる小さき木を川へ流せば、いくともなく水にしたがいて流れ下る(中略)この流るる木ども木曾を経て、美濃のうち太田の四里川上に錦織といふ所に至り、この所に常に大綱を張りて一つも下へ流さず堰止む。ここに筏に送り、桑名熱田へ下す。熱田のうち西の方に白鳥という舟の着く所に下す。この地にて商人買取り、諸国へ売り遣いす」と記している。そこでは多くの仙人が春先に紀伊や近江の山々から移ぎに入り、一般材や樽材として生産し、木曾川へ流し、これら流下材は、錦織で筏に組まれ、下流の貯木場から各地へ販売された、と簡潔に木材生産から流通まで述べ、しかも多くの山稼ぎ人がそれを山で支え、きわめて活発な木曾谷であったことを記している。

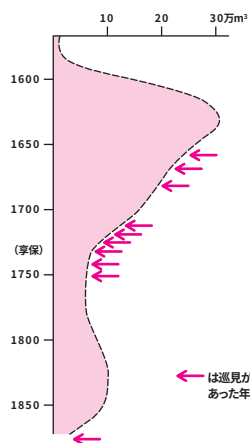
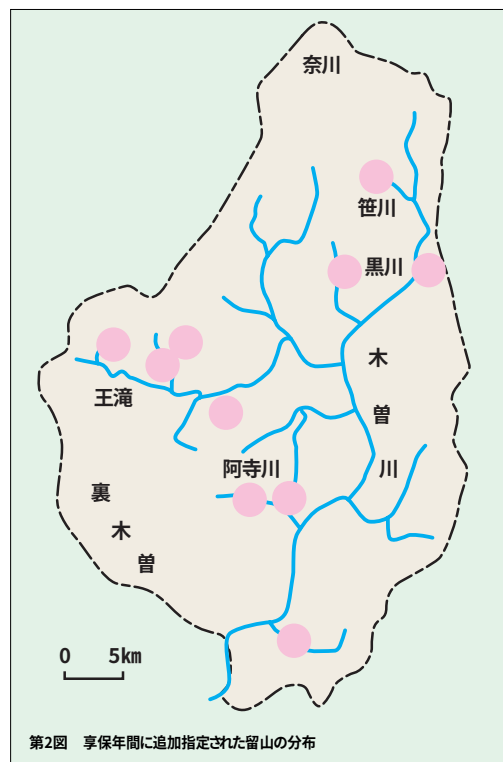
しかし、この記された時期はすでに尾張藩は木曾山の森林資源が枯渇化していることを知り、森林資源の管理を急速に厳しくした時期であった。引用した文中の最初にも木地枕や盆をつくる木が尾張藩によって禁伐にされていることが記されている。それでも多くの仙人がな



第1図 山村氏による寛文21年の樽、土居用木材禁止山の分布

お山にはいついたという記録は、それまでの盛況ぶりを示したものとみえる。

徳川家康もまた、天下を取るとすぐに木曾山を秀吉の手から自分の所領にしている。木曾山の豊かで良質な森林資源を確保するためであった。戦国期の内戦が終ると、新たな幕藩体制の下で城下町や在町、土木工事が一気に始まり、多くの木材が建築資材として必要になった。木材価格は上昇し、木曾山を手中に収めた家康はまさに「金のなる木」を自分のものにし、経済的基盤を固めた。そしてその領有をすすめた山村氏を木曾の代官とした。山村氏は家康から与えられた素木六千駄を地元民へ配分するなど地元民に暮わられたとされる。

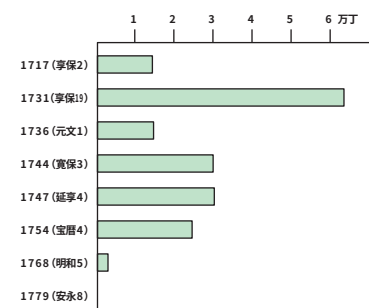


そんな中、家康はわが子義直を尾張に封じさせ(慶長一二年、一六〇七)、その後、木曾山を尾張藩領に加封(元和元年、一六一五)。木曾山は尾張藩領とされた。家康はわが子の経済的基盤を支え、しかも自分の意向の中に木曾山を置いたのである。駿府御殿や江戸城、鎌倉宮、日光東照宮の造営などに多くの木曽材をその後も利用したことばそれを物語っている。そして山元では代官山村氏が木曽材生産を一手に引き受け、木曾谷一帯に大きな労働力市場が形成された。しかし、同時に過伐に危機感を抱くようになり、山村氏は独自に鷹狩用の巣山を設けたり、伐採禁止の山を設けたりした第1図。

尾張藩はやがて安定するようになると、山村氏にまかせていた木曾山に注目するようになり、寛文四年(一六六四)、第一回目になる木

とくに享保年間は相次いで巡検が行なわれ、木曽材生産も大幅に縮小された(第3図)。木曾松など主要な樹木は高冷地での天然下種による再生しかできず、資源回復には伐木禁止による保護政策しかとれなかったのである。

いづれにせよ、市場原理による乱伐から徹底した保護政策への転換と地元住民の犠牲を強いた上で、尾張藩は、金のなる木の回復をめざしたのである。実際、その効果は幕末に少しあらわれている(第3図参照)。



焼畑の制限、松や榎、明松、榎のちにネズも加えた五木の伐採禁止など、地元農民にとって生活基盤を失いかねない制約が次々と付加され、しかも制限地は奥山へも拡大した第2図。

三、秋田杉生産と制限

こうして木曾山の天然林採取による林業生産が急減すると、木材市場は新たな林業地を求めなくてはならなくなった。当時、建築材に有用な松や杉の集中する大

然林分布地はそんなに多くなかった。また植林による育成林は本格化していなかったからである。

秋田杉は成長速度に劣るが、木目の美しさと天井にまで利用できるほどの直径の大きい大径木に特徴があり、わずかに残された秋田杉に対しては今日でもその評価は高い。

すでに秀吉も秋田杉に注目し、地元秋田氏の忠誠の証として都へ上納させていたほどであった。そのために秋田氏は日本海沿いに輸送ルートを開拓した。しかし、家康は天下をとると秋田氏を移封させ、常陸の佐竹氏を秋田へ転封させた。佐竹氏は雪国と森林には不慣れであ

あった。新天地で佐竹氏は新田開発や銀山、銅山の開発をすすめるが、少しずつ秋田杉が上方市場で売れることから、秋田氏の方法をまねる形で、上納ではなく商品として注目するようになった。領内開発の資金になったからである。

木曽材の枯渇状況があらわれようになった延宝期に入ると、上方市場で「秋田杉」は評価が高まり、藩は農民を役役し、商品化をさらにすすめる、上方市場と日本海の北前船ルートを開拓させる形で強く結ばれた。

木曽材が徹底的に保護政策下に置かれた享保年間には、秋田材はその生産量をさらに伸ばした(第4図)。

しかし、秋田杉は百年を越える天然林であり、急速な伐採は資源の枯渇をまねいた。当初、森林管理に不慣れであった佐竹氏の林政の結果でもあった。そんな中で、林政改革に取り組むことになり、第三回目として文化年間には賀藤清右衛門景林による林政改革が行なわれ、山林区分や乱伐禁止、そして尾張藩の林政に

はみられない三六七民による農民との分収による植栽方式も導入した。それは初めての藩独自の林政であったが、それにより、秋田杉の生産制限による保護と育成による秋田杉の存続を可能にした。

こうして秋田杉の供給も減少した中で一八世紀に木材価格は高値となり、そんな中で初めて本格的な植栽による育林技術が大和の吉野川上流域で成立した。それも従来の挿木による植栽でなく、実生による水田の育苗と同じ方法による植栽で、これにより大量の植栽と育成、生産が可能になった。吉野川は大坂市場と近接し、吉野材の流送、筏流に好都合であった。

「吉野林業地帯」の成立である。これにより、わが国の林業は一八世紀に木曾や秋田に代表される採取林業から吉野を代表とする育成林業へと大転換することになったのである。そして、この大転換を可能にした契機が木曾山での森林過伐による徹底した保護政策であった。

四、おわりに

関連文献

- ・奥原篤信(一九九六)『木曾路の記』書林英多左衛門刊。
- ・日本学士院日本科学史刊行会(一九五八)『明治前日本林業技術発達史』同会刊。
- ・北沢啓司(一九六〇)『木曾の山林をめぐる歴史』日本林業調査会。
- ・鈴木一郎(一九三〇)『賀藤景林父子伝』秋田山林会。
- ・秋田宮林局(一九六八)『秋田の杉』林野弘済会秋田支部。
- ・藤田佳久(一九九二)『近世における林業利用の展開にみる東北日本と西南日本』木曾型・飛騨型林業の境界と吉野林業の展開。『歴史地理学』一五七号。
- ・藤田佳久(一九九二)『近世における木曾谷と秋田杉の乱伐にともなう森林保護政策の成立と展開』吉野林業方式成立の背景。『愛知大学総合郷土研究紀要』三七号。
- ・藤田佳久(一九九五)『日本・育成林業地域形成論』古今書院。
- ・藤田佳久(一九九八)『吉野林業地帯』古今書院。

民話の小箱

水無し八丁と弘法大師

開田村

むかしむかし。

末川の上流、小野原という村に、

それはそれは親孝行な子どもがいました。

木曾馬の世話はその子どもの仕事。

ある日、いつものように赤ん坊を背負い、

放牧場まで馬を迎えに行きました。

人なつこい木曾馬は、いつもなら「ホイ、ホイ」と呼ぶ

子どもの声を聞きつけると、「ヒーン」といなくて近よってきます。

ところがその日は、いくら呼んでも近よってきません。

馬たちは末川の深い流れを渡り、向こう岸で草を食んでいたのです。

大声で馬を呼んでも、

声は川の流れにかき消されて、馬の耳には届きません。

そうこうするうちに、赤ん坊はおなかが空いたのかむずかりだし、

子どもは途方にくれてしくしく泣きだしました。

ちやうどその時、ひとりの旅の僧が通りかかりました。

「なぜ泣いているの」

和尚さんは泣いている子どもにたずねました。

子どもは泣きながら馬を指差しその理由を話すと、

「それは気の毒に。私が助けてあげましょう」

和尚さんは微笑みながらうなずくと、川に向かってお経をよみはじめました。

そしてもつていた杖で川をトントンつくと、

不思議なことに、それまで満々と流れていた川の水は、

どんどん川底にしみこんでしまい、ついに川原になてしまいました。

子どもは大喜びで向こう岸から馬を連れてきて、

和尚さんにお礼をいって、かけあして家へ帰っていききました。

馬の群れと子どもをいっしょに見送っていた旅の僧は、

夕暮れの道を月夜沢峠に向かって歩いていきました。

このときから、末川の水は地底を流れるようになり、

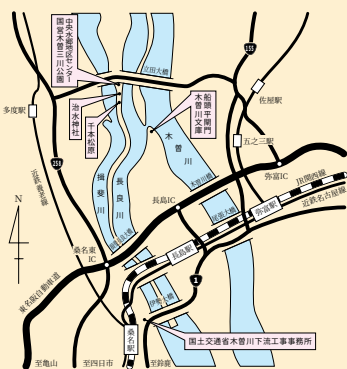
村人たちはこゝを「水無し八丁」と呼ぶようになりました。

この旅の僧は、日本各地を歩いて百姓を救ってくれた

弘法大師であったと伝えられています。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・
木曾川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

秋の気配も深まる中、船頭平河川公園や閘門、木曾川文庫を小学校の見学等で多くの利用者が訪れています。

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近で起こった出来事、地域の情報などをお知らせください。

宛先 「KISSO」編集 FAX.(0567)24-5166

今号の編集にあたって、長野県開田村の皆様及び藤田佳久様にご協力いただきありがとうございました。

次回は、岐阜県根尾村を特集します。

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

●表紙写真●

左上:長野県宝・山下家 左下:木曾馬と白樺
右上:末川 稗田の碑
右下:御嶽山
右:開田村の清流

『KISSO』Vol.44 平成14年10月発行

発行:国土交通省中部地方整備局木曾川下流工事事務所 〒511-0862三重県桑名市播磨字沢南81 TEL (0594) 24-5715

木曾川下流工事事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL (052) 565-1976